

お母さん



なあに おかあさんっていいにおいせんたくしていただいでおいでしよ

誰もが歌ったり、聴いたりしたことがあるだろう「おかあさん」という歌。この歌に、わが母を重ねる人もいれば、今もわが子に歌っている人もいるだろう。とてもやさしく、郷愁感たっぷりのお歌である。だが、全自動洗濯機が当たり前の今の時代、しゃぼんの匂いなど、子どもたちには想像もつかないだろう。モノや情報に溢れ、豊かな時代に生きていく私たち。お腹を空かせた母の帰りを待たなくても、電子レンジでチンもできるし、近くのコンビニでお弁当も買える。スーパーには調理済みの食材が並び、料理の感動もなければ、生産者への感謝もない。カードやケータイがあれば、欲しいモノはいつでもすぐに手に入り、人とも簡単につながれる。約束の時間に遅れても、一言「遅れる」とメールすれば、事が済む時代。電車の中で走りたくなくなるような気持ちに味わうこともなければ、手に汗しながら大切な人への手紙をしたためることもない。便利な世の中とはいえ、それまでだが、反面、私たちはそのことで大きな失くしものをしてしまったようだ。これまで、物質的な豊かさに幸せの価値を見出してきたことで、人としての感覚がどんどん鈍くなっている。豊かな時代に、なぜ人は心の病になるのか。なぜ自ら命を絶つのか。なぜ人が人を愛せないのか。世の中の本当の幸せとは何か…。

お母さんの匂い

決していい匂いばかりではなく、。しかし、その匂いの向こうに気がついたとき、それは、紛。時代を超えて存在する「お母テーマであるかがわかる。

心と匂いのつながり



母はカステラ工場に勤めていた。仕事から帰って台所に立つと、「ぷくん」と漂ってきた卵と砂糖が混じったあま〜い匂い。当時はその匂いが、嫌で嫌でたまらなかつた。留守番をしていたときの寂しさや、お腹が空いた苛立ちなどが重なっていたのだらう。母を助けることよりも、批判することはかりだった。中学校時代、卵が腐った匂いだと思っていた「母の匂い」は、私の心が感じた匂いだったのかもしれない。(山本妙子)

―― 言でいえば「安らぎ」の匂い。化粧の匂い、卵焼きの匂い、入浴後の石けんの匂い…。いずれもその奥には、母独特の「安らぎ」の匂いがありました。一昨年他界した母。遺品を整理し着られる物を持ち帰り、時々袖を通すと、まだその「安らぎ」の匂いが漂ってくるのがあります。たぶん「がんばれ〜」って言うてくれているのかな？ 心も

イラスト/石坂 香

生活の中から感じ 母の匂い



ゆ っくりに記憶をたどると、匂いにも似た、そこにあった空気、一緒に過ごした時間の匂いが母を思い出させるのかもしれない。小学5年生まで家にお風呂がなかった。母と毎日銭湯に行きました。会社から帰り、子どもと銭湯に行く。その、リズム正しくも、少々退屈な日々の日課を、母は欠かすことなく真面目に貫きました。母とあまり遊んだ記憶がないだけ

待ちました。母は玄関に着くとどっと疲れが出るのか、しばらくヘタっていました。飛びついて息を吸い込むと、鉄工所の香り。蹠踏や火花の匂いに母の汗。なんていい匂い！今でもたまに鉄工所の前を歩くと、大きく息を吸っている私がいま。母の元氣と勇氣が欲しくて…。(積山礼子)

●カステラ工場が、大好きな母を自分から奪ったと感じた思春期の少女の複雑な気持ち。梅雨時に部屋中に漂う匂いにも、どこか忙しい母への反発心もあったのだらう。また、鉄工所の匂いで元氣になったのは、懸命に生きていく母親への思い。働く母を持った子ども、微妙に揺れながらも母を思う気持ちが、それぞれの匂いと重なっている。(内田恵利)

●五感の一つである嗅覚が人間の心とつながっていることは明確だが、味覚、触覚、視覚、聴覚も、それ単体の感覚ではないはずだ。心が穏やかなときには、見るものも聴くものも美しく感じ、楽しい食卓なら、食べ物も美味しく感じられるから不思議だ。

お母さんは「お・は・な」の匂い

「お母さんってどんな匂い？」と娘に聞いてみた。(ニコ〜と笑って)「お・は・な」と娘。「お花！お花の匂い!? きゃ〜、ありがと〜」とお祭り騒ぎ。娘をぐちゃぐちゃに抱きしめました。さらに「お花って、どんなお花？」と興奮して尋ねると…。私の顔の中心を指差して、「こ〜こ。お・は・な。ケケケケ。クスクスクス。ヌフヌフヌフ。グフグフグフグフ。グラグラグラグラと、娘の向こうにいた主人が笑いをこらえきれずに笑い始めました…。そう、2歳4か月の娘。【匂い】→【匂う】→【お鼻】ですわ〜。正解です。よくできました。拍手。そう、30歳のお母さん。【お母さんの匂い】→【おはな】→【お花のようないい匂い】と勘違い。お母さん、涙目です…。理想と現実。お母さん、恥ずかしいなあ…。その後、何度聞いても、「何だっけ？ キャハハ」とはぐらかされます。♪お母さん な〜にお母さんっていいにおい♪の歌。娘は大好きでよく歌っているのですが…。お母さんの修行がまだまだ足りませんでした。(三澤こず恵)



毎年、タケノコの季節になると、母を思い出します。子どもの頃は、祖父、叔父、叔母のいる大家族だったので、たくさんタケノコの皮をむきました。皮をむいたときの匂い、ぬかを入れてゆがくときの匂い。わかめを入れて炊くときの匂い。それが、母の匂いであり、出来上がるまで全部まとめて、「おふくろの味」だと思っています。(守備朋子)

息子(小5)に「お母さんの匂いは？」と聞くと、「味噌汁の匂い！」と即答！「味噌汁の匂いを嗅ぐと、ああ、おかあだ〜って思うよ」そんなんだ！ まあ、ほとんど毎日つくっているもんね。思いも寄らなかつたけど、お母さん業の一つを認めてもらったようで、ちょっとうれしい答えでした。(小越理子)

がんばる お母さんの匂い



●毎日の生活シーンの中には、さまざま匂いがある。母から子に伝える子育ての文化の中で、「食」ほど大きな存在はないだろう。この「おふくろの味」さえあれば、子

食 堂で働いていた母は、煮物の匂いや、何やらが混じった匂い。帰宅した母が家で食事の支度を始めると、料理の匂いと仕事場の匂いが

いい感じに混ざり合い、なぜかそれは、ホッとさせる「幸せの匂い」だった。「がんばるお母さん」の匂いだったのかな。(山森波江)